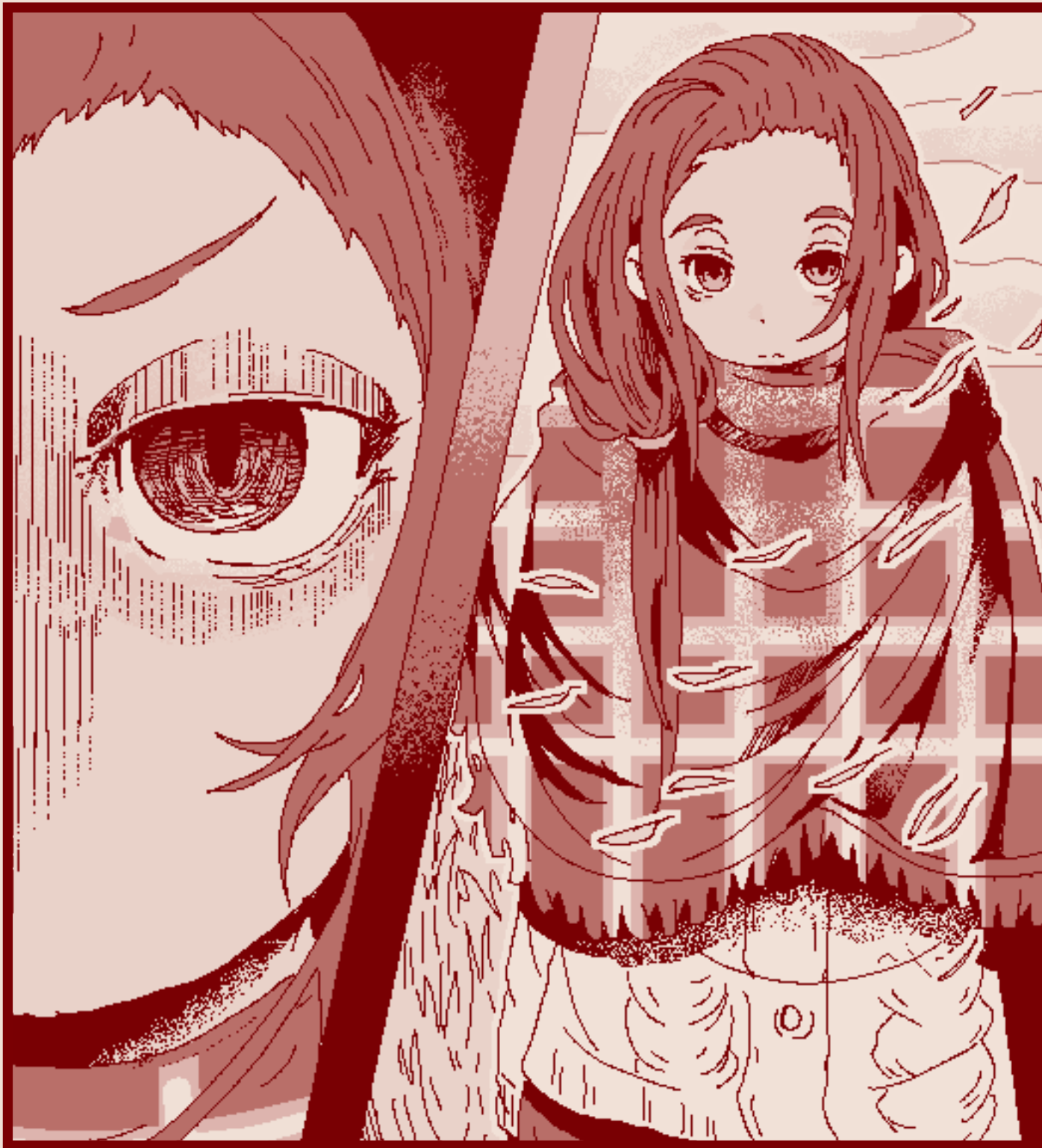
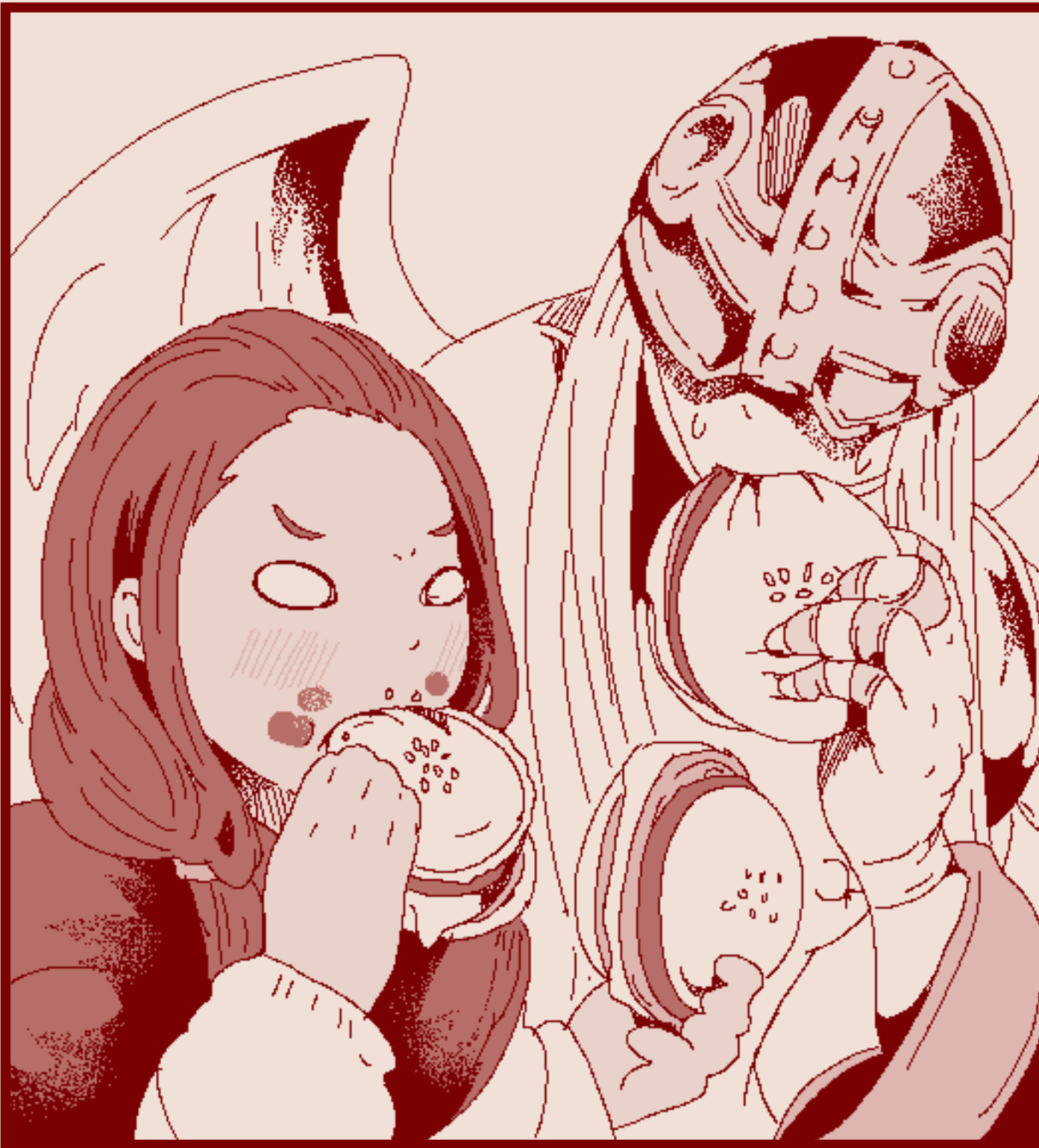




あの子と出会ったのは、どのくらい昔だったか。
DW にシオンが出来て間もなくの頃で、急速に力を付けるデジモン達を管理のため天使達の進化を促す必要があった。
そのため、マテリアルワールドからパートナーを…選ばれし子供達を連れて来るプロジェクトが進行した。
身寄りのない子供など有体に言えばマテリアルワールドでいなくなっても誰も困らない者。
そういった子供達を進化の可能性があるデジモンに当てがれた。
あの子も貧しい村に生まれその齢にして母親に言われ客を取らされた子。
母親はその金を男に貢ぎ、男はその金で賭博三昧。
ワシが初めて会ったあの子は世界を憎んでいた。



目的は、自分達の進化の為という利己的なものであったが、せめてものパートナーという縁。

ワシはあの子が再び世界を愛せる様に努めたかった。

それには、大分苦心したのを覚えている。

如何せん堅物と言われる天使達からも特に融通が利かないし、不器用だと言われていたワシでもあったし。

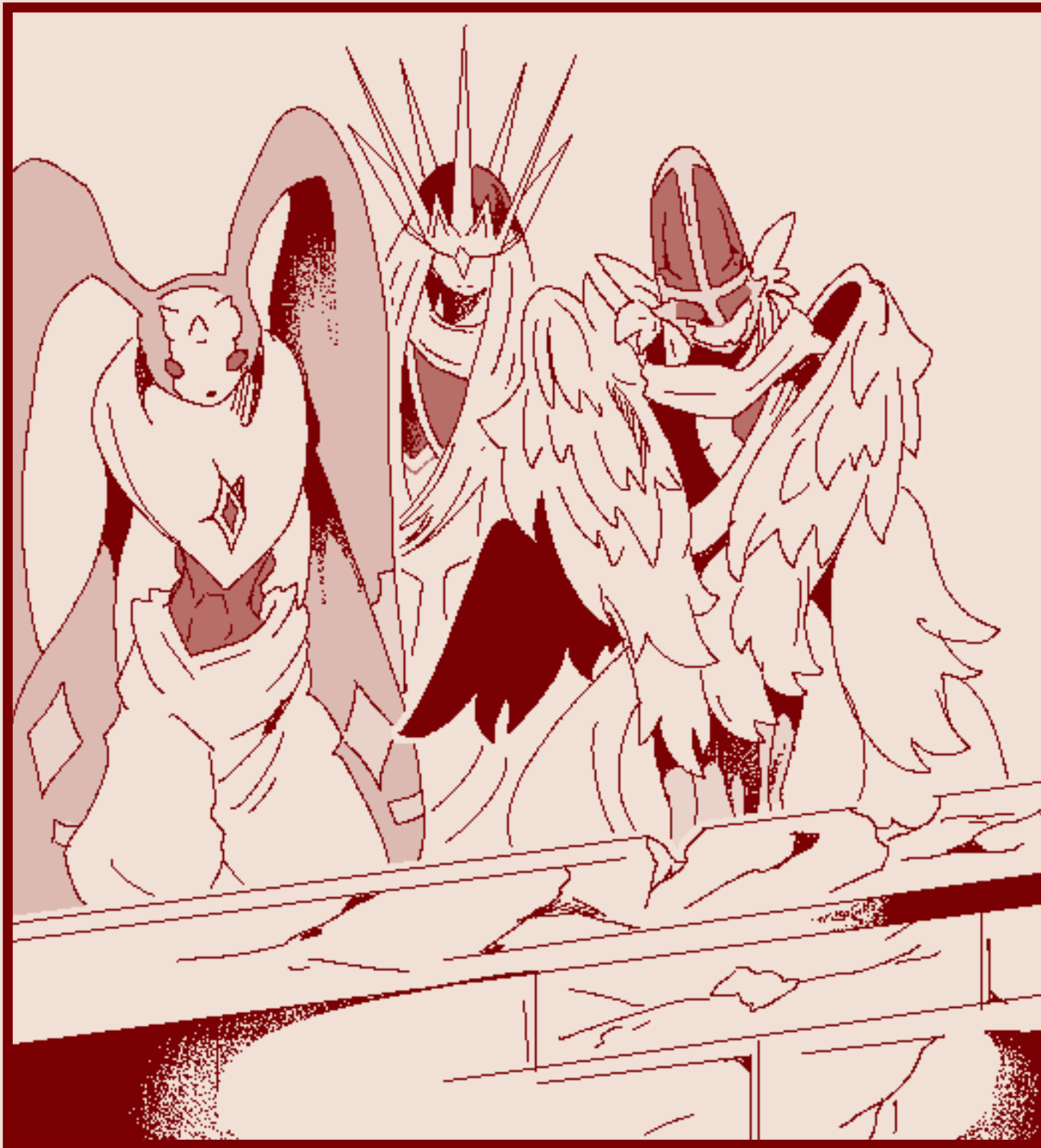
温かい食事に寝床を与えてもあの子は心を開いてくれなかった。

時を同じくパートナーを得てアンティラモンに進化した友に話を聞いたところ、食事は共に食べなければ駄目だと言われた。

食事は栄養の補給ではないかと思ったが、その助言に従い時間が経った頃…あの子も笑顔を見せるようになってきた。

何よりワシ自身が食事に別の意味を見いだせた。

とても温かい時であったように思える。



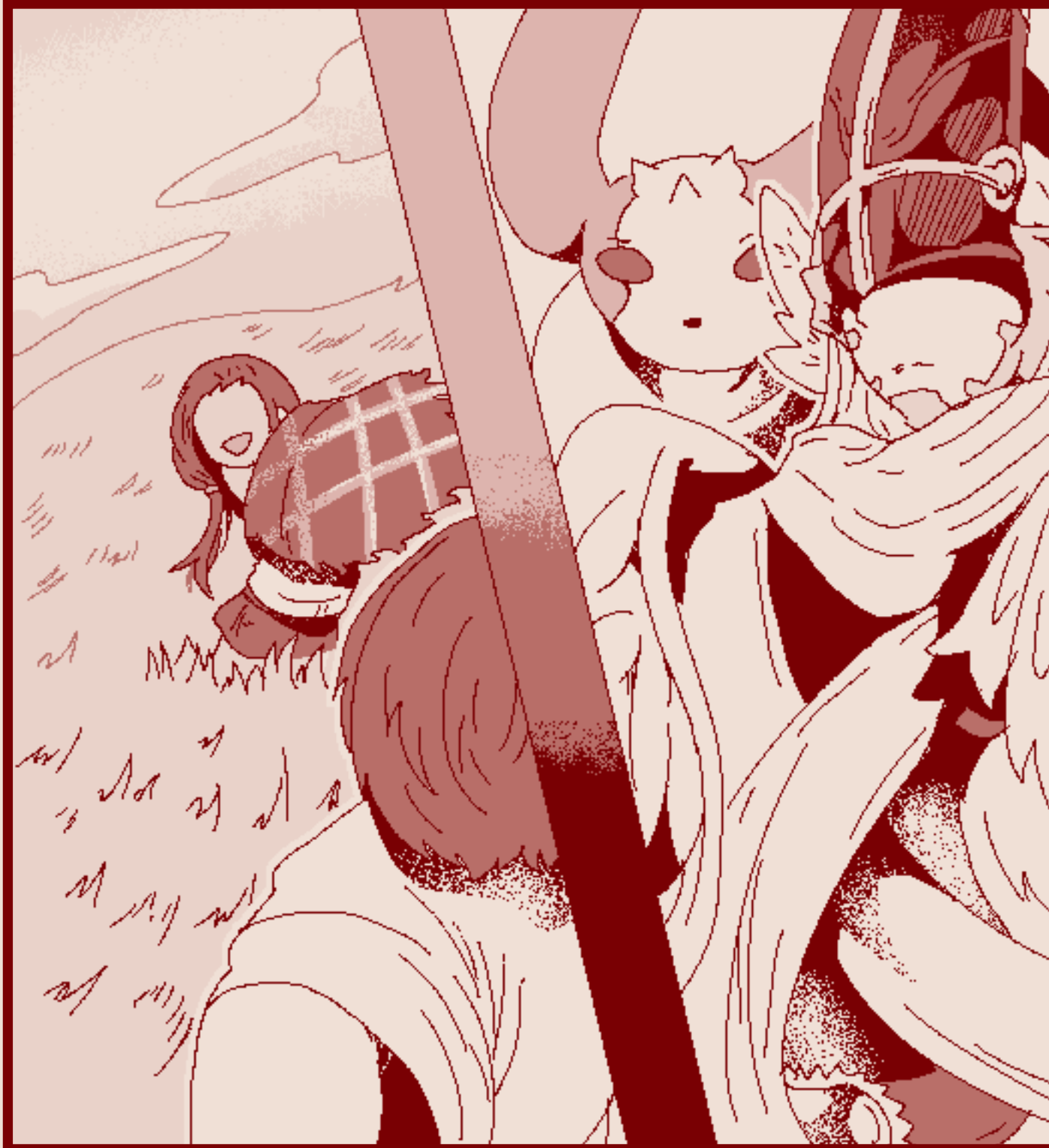
進化をし、完全体になった頃合いだったか…次第にワシは人間に目的以上の興味が湧いた。

同じような考えを持つ友ふたりと三人でマテリアルワールドを訪れるようになった。

マテリアルワールドは醜い争いが絶えず行われ、なによりそれで得られるものが余りにも虚ろで、空ろで、移ろいやすかった。

あの子の村も戦禍で既になく、それを行った政権も既に変わっていた。

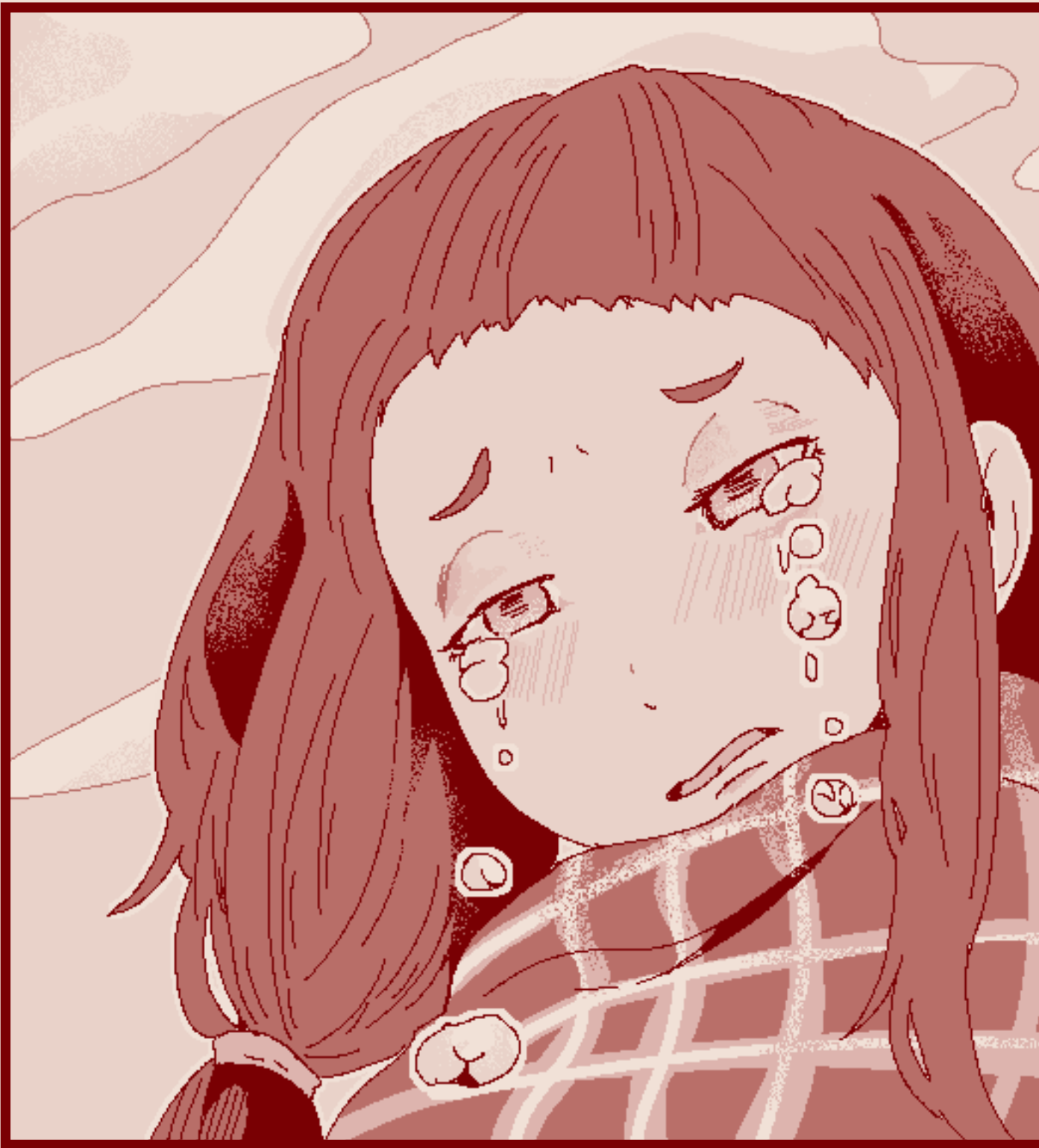
他のひとは嘆き、ひとは悲しみ、ワシはせめて彼女を…それでもひとの価値と
思えるものを守りたいと思った。



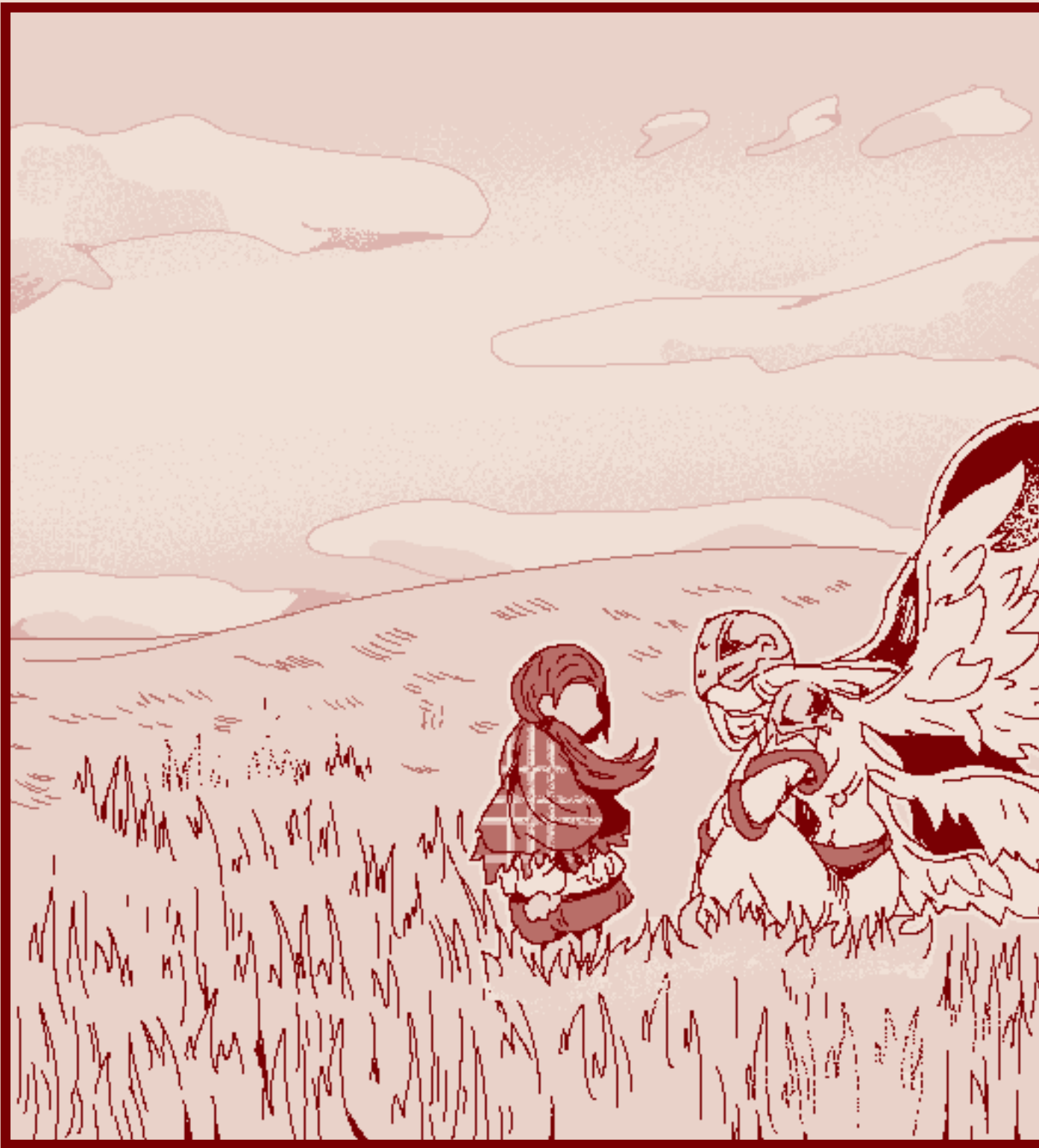
志を同じくした友であるアンティラモンのパートナーの子供とあの子を会わせるようになった。

その頃には、あの子も笑うようになっていた。

今だ泣く事も多いが、また人を信じこの世界を愛せるようになってもらいたいと心から思った。



ある日、進化が途絶え成熟期へ戻った時期があった。
パートナーを得ての進化はデジモンにとって外部からの栄養を無理矢理詰め込んでいる様なもの。
自らの力だけで進化を保てるようになるのは相応に時間が掛かる。
そして、パートナーの心の変調に大きく影響する。
別に責める気は何もなかった、ただあの子が心配であった。
何か嫌な事をしてしまったのかあの子に聞くとあの子は大粒の涙を流した。
聞けばあの子はこっそりとワシらの後に付いてマテリアルワールド…あの子の故郷の有様を見てしまったという事であった。
ワシはしまったと思った。
故郷の惨状を知ればあの子が傷つくのは当然だと思った。
しかし、あの子の涙の理由は別にあった。
あの子は…故郷が母親が死んだ事を知り、笑みが零れたと言った。



「それは、受け止める準備がなかっただけだ。

逆にそれを悔める事を誇るべきだ。」

「私は汚れてるから…エンジェモンみたいに綺麗な考えはできないよ。

私はそうは思えない…ただ、嬉しかったんだ。

お母ちゃんもあの男達も死んだと思ってただ…。」

「君が優しい子なのは、よく知っている…君は純粋で幼い、その黒い感情に流されるのも至極真っ当な事だ。

だが、君はそれに負けずその涙を流している。

その涙は決して汚れてなんかいない。

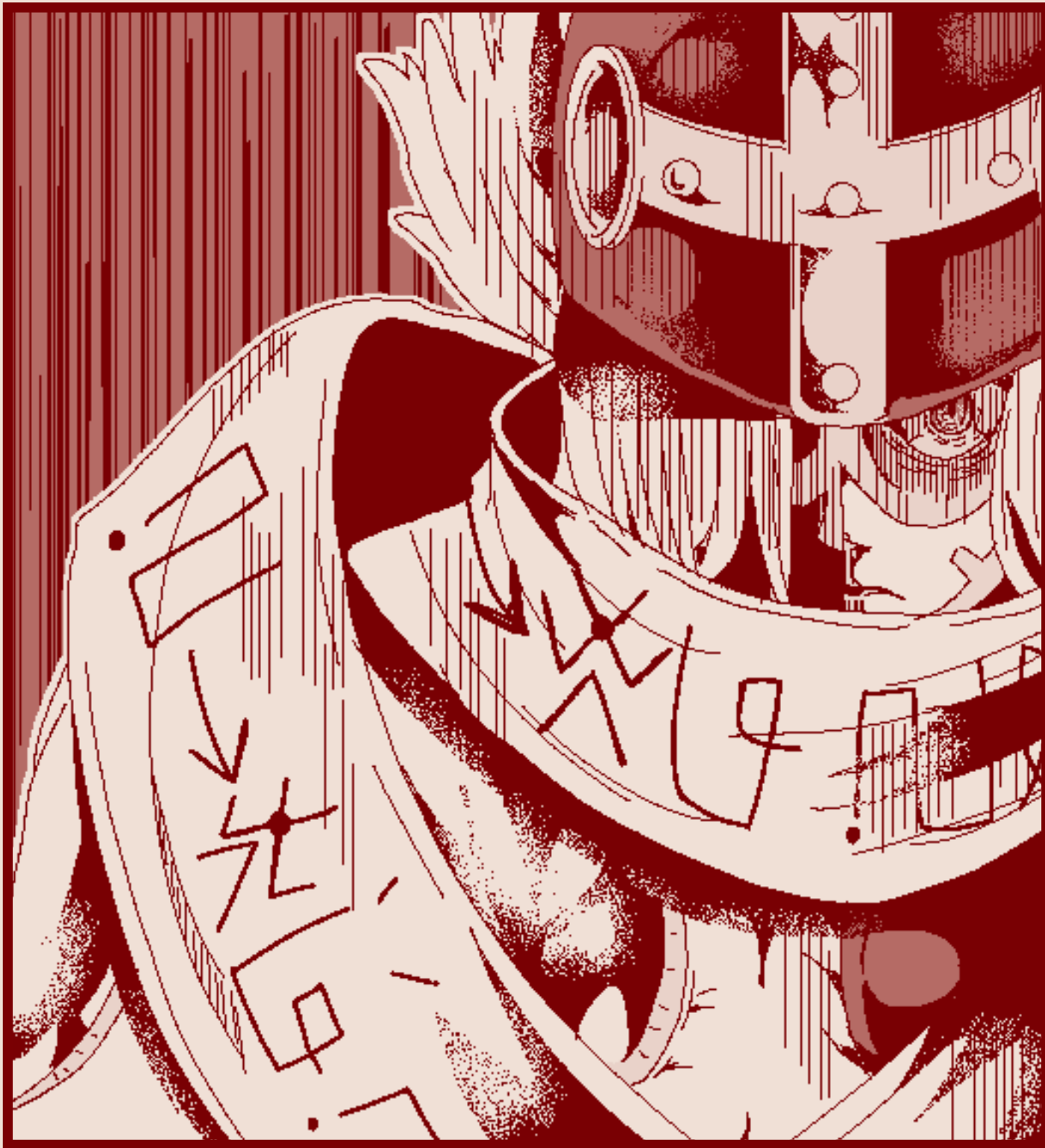
主もしっかりと見られている。

それに…。」

「それに？」

「これから、私が君をその黒い感情から守ってみせるよ。」

それは、微かにでも同じように黒い感情が浮かんでいだ自分にも言い聞かせるための言葉でもあった。



事が起こり始めたのはそれから間もなくであった。

上位の天使達の中から選ばれし子供達を危険視する声が上がった。

子供達は、天使だけでなく触れ合ったデジモンの進化を促しそして、天使の中から獣に堕ちた者ネフィリムを…そして獣の中で強い力を持つ者…友であるケルビモンを産みだした事を重く見ていた。

上位の天使達は選ばれし子供を抱え込み隔離し、獣達の排除を始めた。

主流派の上位の天使達と獣の烙印を押された者とパートナーを取り戻そうと者として間もなく争いが起こった。

ワシも戦い…破れあの子は連れ去られた。



暫く経ち、ケルビモンは獣の天使を天使達の下位に位置させる事を条件に主流の天使達と和平を結び合流する事となった。

ワシはケルビモンをなじったが友は、これ以上の争いを見たくないと言いお互いの袂を別った。

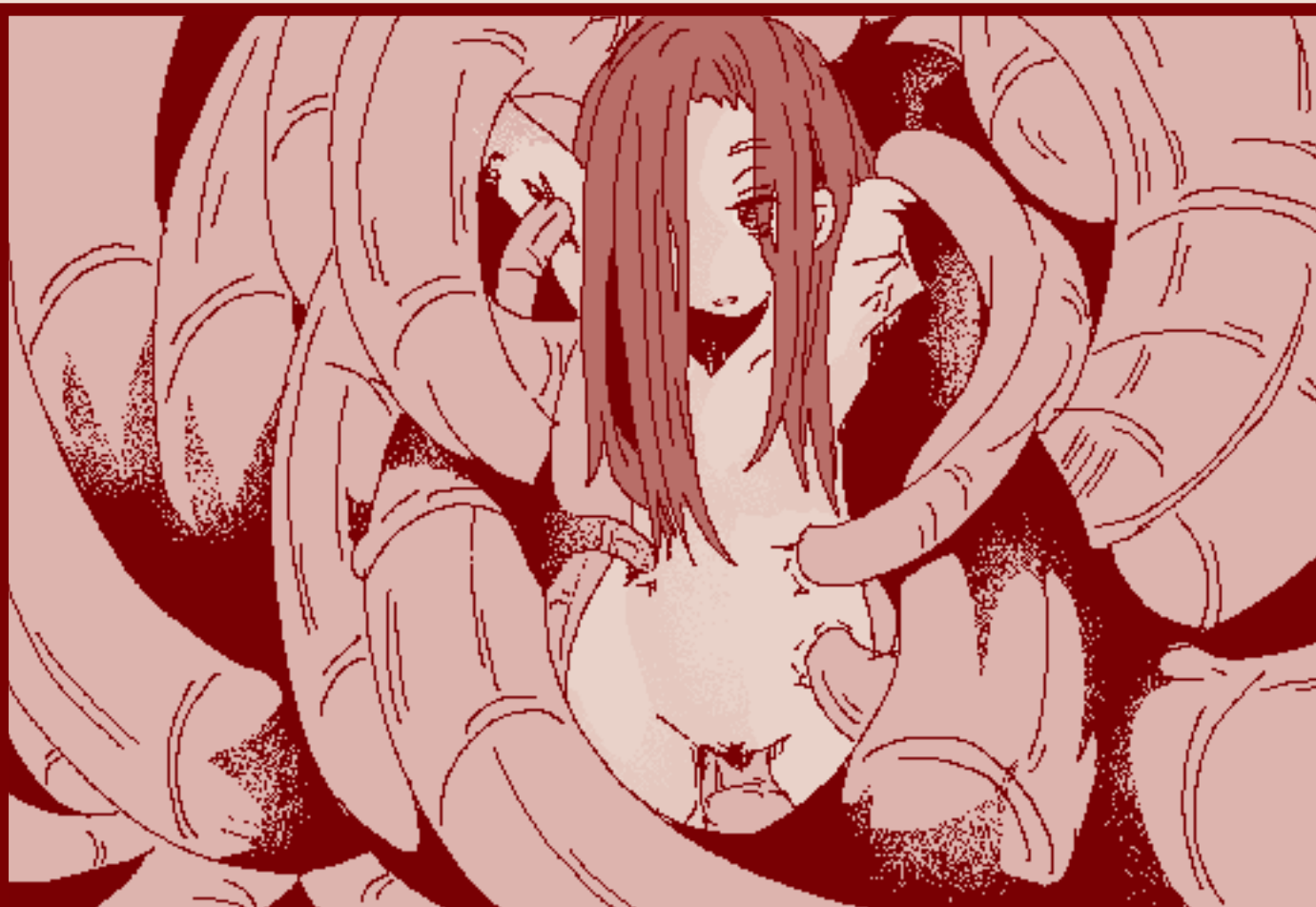
黒い感情が次第に大きくなっていったのを覚えている。

友の優しさを弱さにしか思えなくなっていた。



主流派との争いが激化していく中で、突如として強力な獣型…異形のデジモンが現れ始めた。

ワシらは次第に追い詰められ遂には、全滅を待つばかりであった。



その理由を知ったのは、まさに最期という時であった。
ワシは、獣の中にあの子を見た。
主流派は、人間を道具として割り切り、生体ユニットとしてデジモンに組み込み強制的に進化を促した。
ケルビモンはこれを知っているのか？
分かっているあのお人好しがこんな事を許容するはずがない、下手に出た結果良いように使われているのであろう。
瞬間、微かにしか感じ取れなかった黒い感情がワシの心を塗りつぶした。
今までにない力と抑え込めない感情。
生体ユニットに改造された人間は生命自体がデジモンと繋がっておりあの子はもう助からなかった。
今でもあの子の最期の言葉がへばり付いて離れない。

「嘘つき…。」



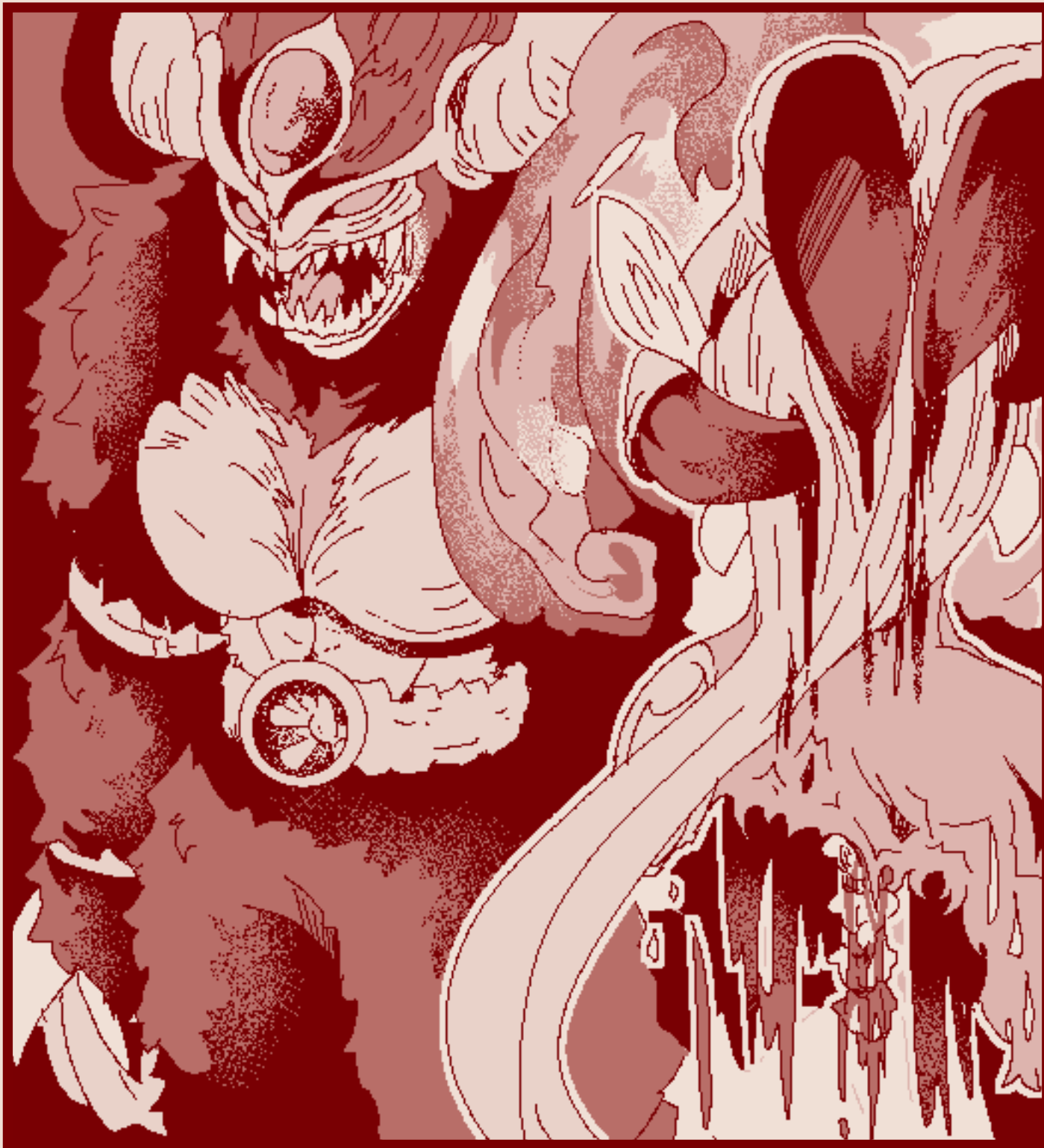
主は乗り越えられない試練を与えないと言う。
なぜ…この気持ちを抑えなければならない。
苦しかったろうに…辛かったろうに。
ただ後悔と怒りだけが満ち溢れる。
これを悪しき感情と言うのか？なぜ…獣の同胞は迫害され、あの子達はこんな末路を迎えねばならなかった？

我々が間違ったのか？

否、ならばこの憤怒を否定してみせろ。

我々は否定したお前達を否定してみせる。

気付けば、ワシは黒い感情そのものとなっていた。



気付けばワシは堕ちた者たちの中心にいらなくなった。

どのくらい時が経った？

憤怒に身を任せ、後悔はしていないが少し疲れた頃であった。

十闘士、選ばれし子供達の影響を受け始めて究極体へ進化した天使ではないデジモン達。

奴らは馬鹿な事に自分達を軽んじる天使に組し、平和だの寝ぼけた事を言っている。

その中の力を与えられた者も現れた。

そんな連中の言葉…。

「いつか、私達の意志を継いだものがお前を必ず討ち倒す。」

後悔など何もない、ただ羽根が白くあの子の隣にいた頃の自分が今でも見ている気がする。

殺せる筈のその者をワシは力が残る様に散らした。



「いつか、私達の意志を継いだものがお前を必ず討ち倒す。」

それもいいだろう…その意志を継いだ者がこのいつかの抜け殻を壊せるか…？



インペリアルドラモン・PM が進化の時に散らした雲の合間から覗いた青空をデーモンは見ていた。

もうその瞳に力はなかった。

(思い出した…そうか…ずっと雲の向こうには。)

退化しぐったりとしたチビモンを抱き叶達がデーモンに近づく。

「勇太…チビモン預かっててくれないか。」

「…。」

勇太が叶に視線を送る、それはこれからの行動への疑義の目であった。

それに叶は微笑んで返す。

「…大丈夫だ。」

それに一呼吸置いてから勇太は納得しチビモンを預かる。

ゆっくりと叶はデーモンに近づき視線を合わせるように屈む。

デーモンも視線だけであるがそれに応えるように向けた。



「これで自由になれたか叶？」

「…ああ。

…ひとつだけ、聞かせてくれ。

なんであんたは俺を部下にしたんだ。」

「…あの時は気まぐれだと思ったのだからな。

ゲートを開くには、鮎川や渡辺よりも使えそうだと。

だが…今思うと、お前の目…何かにもがく目が、ワシや…あの子に似ていた気がしたんだろうな。

今までを後悔した事はない。

ただ…後ろを振り返るとワシには何も残っていなかった。

最期に何かを残したかったのかもしれん。

…まあお前には余計な世話だったようだがな…。」

その言葉に、叶はデーモンの手を掴んだ。

「…違う！

俺はあんたと同じだ…！俺は自由になりたかった！

全部…全部壊したかった…俺を縛るもん全部。

それが…俺の本音だ…！」

「馬鹿を言うな…お前は、ワシと違ってあの雲を越えたではないか。」

デーモンは雲の合間から覗く青空を見た。

「あんたが…導いてくれたから越えられたんだ。

ずっと勇太の隣にいたらきっと…俺は。」

「…全く…揃って大馬鹿者だな。」

デーモンは掴んだ手を離し、力を籠める。

叶が持っていたデジヴァイスが壊れ、新しいデジヴァイスがあった。

そして、ゲートを開いた。

「ならば今度こそ、お前の自由を確かめてこい。

マテリアルワールドへ帰りたくなったら、またムゲンマウンテンへ行け。

そこにゲートを残してある。」

「デーモン…。」

ボロボロのアンティラモン達が駆けつける。

「…みんなは先に行っててくれないか？

私は最後にデーモンとふたりで話をしたい。」

その言葉に慎平達は頷き勇太達を連れて離れる。



「…お互いボロボロだな…友よ。」

「ああ…少し疲れた。」

アンティラモンが口火を切り、小さく穏やかにポツポツと話し始めた。

「お前は…あの時の青空を覚えているか？…友よ。」

「…勿論だ。」

「…そうか、だからお前はそちら側に居続けられたのだな。　ワシは…あの空も…あの子の名前すらもう…忘れてしまった。」

残っていたのは、身を焼き尽くす怒りだけだ。」

「…すまない。」

「…何がしたかったのだろうか。」

いつもあの子が見ているような気がしていた。

憤怒に身を任せる事を良しとしながらどこか…誰かに、否定して欲しかった。

いつかの自分に…理想を持った誰かにワシを壊して欲しかった。」

「私も…ずっと分からない。」

あの時…君と同じように大切な誰かの為に全てをかなぐり捨てても戦うべきだったんじゃないか…考えない日はない。…だから、例え世界中の誰もが…君自身が自分を許さなくても私だけは君を許す。

私は…君の味方だ。」

「…フッ、傲慢でお前らしい。」

それにワシは、まあ部下にはそこそこ慕われているし？

叶もワシの味方だ。」

「…ぬう。」

「だが…まあ…そうだな、一応感謝しておくよ。」

「…。」

「アンティラモン…いや、ケルビモン。」

先程の話、お前も分かっているのだろうか？

叶や鬼塚 光…日野 勇太がこの世界に呼ばれた理由を。

デザイアリングもワシは、並行世界から回収したと思っていたがどうにも誰かの策略を感じる。

何かが、あのリングに隠されている。」

「…ソドムの地下にあったという街。」

「…そうだ、鮎川に探りを入れさせていたが勝手にオグドモンの一部を持ち逃げしたからワシも詳しくは知らんが気を付けろ。」

お前らに対してワシだけ出たのは最後に殺し合いたかったのもあるが…どちらかといえ部下にこの先の闘いに備えさせるためだ。

…それでも一部の跳ねっかえりはお前達に向かうだろうが。」

「…ああ。」

いい部下じゃないか。」

「フッ…もう行け。」

ワシは最後にあいつらに話がある。」

そう言うとデーモンはベルスターモンとサンドリモンを見た。

「…。」



「もう行くの？」

「ああ、俺がいてもこんなじゃ役に立たないだろうしな。

お前なら…鬼塚を助けられるさ。」

「…そんなの当たり前だろ。」

「生意気…その…ありがとうな。

色々世話になった。」

「…。」

「まあ…行くぞ。

いつまでゲートが開いてるか分からないしな。」

そう言うと叶はゲートへ向かって行く。

「…叶!!」

勇太は叶を呼び止めたが続く言葉が出なかった。

ただ、声にならない声で小さく。

「また…会えるよね？」

聞こえなかった言葉に叶は、小さく微笑み、そしてゲートに消えて行った。



...

「お前も行くのか勇太？」

慎平が勇太に声を掛ける。

「…慎平さん。」

ええ、俺も早く光とデビドラモンを迎えに行かないと。」

「遅いって怒られそうだしね。」

言えてると勇太はヴォーボモンの軽口に応えた。

「アンティラモンは、俺達はここに残ってやるべき事があるって言うけど…やっぱり！」

勇太はその言葉に小さく微笑み、空を見上げた。

空から小さくラッパの音が聞こえた様に思えた。

「アンティラモンが、必要って言うなら協力してあげてください。」

それに…光は俺達の力だけで迎えに行きたいんです。」

「…でも！」

慎平の言葉を雪奈が前に出て遮った。

「これ…。」

雪奈が預かっていた上着を渡す。

「服…大丈夫です？」

「魔法の力でね…ねぇ勇太君。」

雪奈が勇太を抱きしめる。

「必ず…光ちゃんと帰って来てね。」

それは、何かを察しての言葉であった。

ヴォーボモンはその言葉に少し俯いた。



「…はい、必ず。」

そう言い残すと勇太はヴォルケニックドラモンに乗りオグドモンへと向かって行った。